

白川研究所便り



華雪 書「遊」紙、墨 2017 一公開製作一

(2017年12月16日 記念講演会「漢字と書一日中韓のはざまと女性」にて)

目次 ◆ index

白川静博士没後十年企画	2
立命館白川静記念東洋文字文化賞の選考結果について	5
立命館土曜講座特集「白川学の展望と未来」	7
シンポジウム「東洋の漢字文化と白川静」	9
萩原 正樹	
第八回創作漢字コンテスト	10
加地 伸行	
学術事業活動概況	11
芳村 弘道	
漢字学研究会活動報告	13
大形 徹	
教育活動報告	14
後藤 文男	
文化事業活動報告	16
久保 裕之	
七年目を迎えた「漢字教育士」の活動	19
久保 裕之	
白川静著書一覧	20

第12号
発行
18.3.31

立命館大学
白川静記念東洋文字文化研究所
〒603-8507 京都市北区等持院北町56-1
電話 075-465-8225(事務局)
Mail ro-toyo@st.ritsumei.ac.jp
URL <http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/k-rsc/sio/index.html>

研究所のこれから..... 2

杉橋 隆夫

白川静博士没後十年企画..... 2

立命館白川静記念東洋文字文化賞の選考結果について..... 5

立命館土曜講座特集「白川学の展望と未来」..... 7

シンポジウム「東洋の漢字文化と白川静」..... 9

萩原 正樹

第八回創作漢字コンテスト..... 10

加地 伸行

学術事業活動概況..... 11

芳村 弘道

漢字学研究会活動報告..... 13

大形 徹

教育活動報告..... 14

後藤 文男

文化事業活動報告..... 16

久保 裕之

七年目を迎えた「漢字教育士」の活動..... 19

久保 裕之

白川静著書一覧..... 20

研究所のこれから

所長 杉橋 隆夫

前号では白川先生の没後十年記念事業と、該事業の実施を通じて研究所が目指すところとを申し述べました。事業内容の一部は、前号および本号の誌面で紹介されています。

本年秋には先生の十三回忌を迎えます。本号が刊行される頃には研究所の「常置化」についても、一応の目途が立てばと期待しています。今年も様々な記念事業を企画・遂行したいものです。

こうした状況下に、近時次第に収斂、明確化してきた研究所の課題・方向性は、大略次の通りです。

一、東洋文字文化研究の拠点化。日本国内のみならず、東アジア・世界的規模においてこれを目指します。

一、「白川文字学」から「白川学」への展開。いうまでもなく白川名誉教授の学問は、たんに「文字学」に留まらない広い分野・地域・時代等に及んでいます。研究の総合化と先生の研究の発展過程の追究、研究対象地域と分野・時代の拡大が課題であり、総じていえば、「祖述」の時代から「大成」へと、目標を高く掲げたいということです。

一、そうした課題に因應するためには、若手研究者の育成が急がれます。システムの構築と実績の積み重ねが求められています。

一、啓蒙・教育活動の拡充。この分野では「文化事業」部門として、従来から十分な実績を挙げてきました。今後は、小学校から大学院までを有し、心理・医学分野を包含する立命館学園を象徴する事業として、重点的に拡充させて行かねばなりません。

一、施設問題も避けがたい課題です。叙上の諸案件とともに、関係諸方

面のご理解とご支援とを伏してお願い申し上げます。

(立命館大学名誉教授)

白川静博士没後十年企画

研究成果報告会

二〇一七年四月二十二日、立命館大学衣笠キャンパス平井嘉一郎記念図書館カンファレンスルームにて実施されました。

報告会では、芳村弘道副所長の司会により、五名の研究所員が報告しました。

まず、萩原正樹氏は、文学部で開講されている「人文学特殊講義」が、白川静博士の「白川学」の概要を把握することを通して、独創的な発想や批判的精神など、学問研究の基礎を学ぶとともに、本学出身である世界的な学者の学問と生涯について理解を深めていく目的があることについて説明しました。次に、高島敏夫氏が、自身の近刊著である『白川文字学の原点に還る「甲骨金文字論叢」を読む』の紹介と自身の研究について述べました。さらに、大形徹氏と佐藤信弥氏は、漢字学研究会の活動内容、会員の活動業績、会員の白川文字学・漢字学の教育・普及に関する概況、研究会の今後の方向性などを報告しました。そして最後に、久保裕之氏が、白川静先生の漢字・漢文の将来への憂いや、「東洋」の回復という願いが文化事業の原点となった事を説明し、現在取り組んでいる体験型漢字講座―漢字探検隊、附属校・提携校での白川静展・特別授業、漢字教育士などについて解説しました。

連続講座

『甲骨文(卜辞)を通して殷代社会に分け入る』

客員研究員 高島 敏夫

「第一回 殷人の生活と自然神」(二〇一七年七月一日)・「第二回 殷人と祖霊への恐れ」(二〇一七年十月二十一日)・「第三回 古代殷王朝の宗教的な社会秩序」(二〇一八年一月十三日)の全三回にわたり、甲骨文で記された文(卜辞)を具体的に読み、卜辞を通して殷代社会の特質や人々の考え(世界観)を実感的に理解していきましました。言い換えれば、甲骨文の字形から文字の成り立ちを考える初歩的な段階から一歩進んで、甲骨文の言語世界に分け入る段階へとレベルアップして頂く試みで、毎回多くの参加者を得ました。

(文学部非常勤講師)



高島敏夫 著

『西周王朝論』(話体版)』

(朋友書店 二〇一七年十二月)

『文字講話』上映会

白川静先生が一九九〇年から二〇〇四年に亘って行われた「文字講話」の映像を全二十四回にわたり上映しています。初回は、二〇一七年十月二十八日「第一話 文字以前」に始まり、現在までに「第六話 原始の宗教」(二〇一八年三月二十四日)を終了しました。

毎回、多くの参加者が在りし日の先生を偲びつつ、熱心に先生の研究を学びなされています。この上映会は、二〇一八年度も継続します。

(以上、編集部)

『私の白川静』について

副所長 芳村 弘道

二〇一六年十月十五日に白川静先生歿後十周年記念の企画の一つとして平井嘉一郎記念図書館カンファレンスルームにおいて、在りし日の白川先生の思い出を語り、先生のお人柄、学問人生を偲ぶ公開の座談会「白川静先生を語る会」が行われた。座談は白川先生のご長女の津崎史氏と『白川静の世界』(「別冊太陽」平凡社、二〇〇一年十二月)を編集された西川照子氏に語りあっていた。小生が司会となって話題を進めるという形で行われた。本書は、この座談会の内容をもとに再構成、加筆され、西川氏によって編集されたものである。

序章「白川静」の掌に乗る―遊べ、遊べ、遊べ―は、西川氏が書き下ろされたもので、座談の後に津崎史氏が詠まれた次の三首の短歌が載せられている。

あらすじの有り無しなどはかかたりなく話は途切れず父を語る会
緊張感なきまま始まる「語る会」父ゆゑ知りあふ人らと鼎談

白川静を語る会三人それぞれの立場のありて我は娘ぞ

この三首に詠われているように、「三人それぞれの立場」から話題が次つぎに展開した座談の内容を、本章の五章それぞれに漢字一文字をキーワードにして左記の通りに構成している。

第一章 歌 白川静が歌う―神への申し文

第二章 笑 白川静が笑う―親爺ギャグ

第三章 神 白川静が恋う―母恋し

第四章 日(サイ) 白川静が書く―卜文・金文

第五章 遊 白川静が楽しむ―「孤独」の喜び

白川静先生は、郷里福井の「万葉調」の歌人である橘曙覧に親しまれ

たことを契機に『万葉集』に深い関心をもち、中国古代の歌謡集『詩経』との比較を志して学問の道に進まれた。そこで座談は「歌」を話題に始まったので、第一章は「歌」字が冠されている。この章では白川先生が好まれた曙覧の「独楽吟」や、法律事務所勤務されていた当時の深刻な世情を詠じられた短歌が紹介され、学者「白川静」とは別の一面を伝えようとする本書の主旨が冒頭から示されている。第二章は、白川先生は、侵しきたい威厳を感じるお人柄と思われるが、実は一面「おちゃめ」などところを持ち合わせていたエピソードが語られている。第三章は、前章に「静」の名は、先生の母堂の命名なることを受け、お母様とする夫人に対する先生の深い思いが語られている。第四章は、「日」を中心にした白川文字学に関する内容である。第五章は、『詩経』の訳注や字書三部作の編纂についての思い出などが話されている。終章は白川先生のご教訓などを回想した小生による「白川静先生を想う―桂東の教え―」である。

本書には、編集に当たられた西川様が所蔵される白川先生のお写真や図版がふんだんに挿入され、視覚を通して白川先生に接する思いを起させる工夫が施されている。また本文の内容の理解を助ける脚注が加えられ、親しみやすい書籍になっている。本書が出版されるや早速に注目され、「讀賣新聞」二〇一七年十一月十一日の特別編集委員・橋本五郎氏の筆による「五郎ワールド」に、「この書によって険峻なる高峰『白川学』の背後にある『人間としての白川静』『普段着の白川静』が浮かび上がってくる」と紹介されたのは、洵に知己を得た感がして、ありがたいことであった。

(文学部教授)

記念講演会「漢字と書―日中韓のはざまと女性」

客員研究員 張 莉

二〇一七年十二月十六日(土) 立命館大学衣笠キャンパス創思館カンファレンスルームで、「漢字と書―日中韓のはざまと女性」というテーマで白川静博士没後十周年企画として記念講演会が行われた。講演のメンバーは立命館大学出身の書家 華雪氏、韓国の事情に詳しい立命館大学文学部准教授金津日出美氏と私、大阪教育大学に勤める張莉の三人。最初に、華雪氏に筆で白川博士が好んだ「遊」「藝(芸)」の文字をこ揮毫いただいた。

「遊」の字の成り立ちは、王子が先祖霊の宿る旗を掲げ一族を連れて外遊する様子に象る。華雪氏の揮毫は筆意を筆に込め、精神を集中して行う。何枚か書かれたが、力強く鋭い中にも和らかみのある字で旗のなびく様がなまめかしく書かれていた。その次に「藝」の字の揮毫も大変に迫力があり、見ている人の心を一点に集中させた。

華雪氏の揮毫の後に張莉の司会により三人で鼎談が行われた。まず、現在の日中韓における漢字文化のあり方についての論議。中国の簡体字・繁体字・日本の略字体の比較や韓国における漢字使用の実情が説明された。東洋の文化である書は、中国では書法、朝鮮では書芸、日本では書道と呼ばれる。そこにある意識の違いから、それぞれの言葉のあり方が話題となった。また、女性が三人集まった場にちなみ、「女」や「女性」を含む文字に対する話題に触れた。さらに、古今における日中韓での男性に対する女性の地位やあり方などの話が展開され、楽しい語らいの中で鼎談は終わりを迎えた。

(大阪教育大学教育学部准教授)



華雪氏の揮毫の様子



鼎談の様子

立命館白川静記念東洋文字 文化賞の選考結果について

立命館白川静記念東洋文字文化賞は、立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所が、東洋文字文化の分野における有為な人材を奨励支援するために、功績のある個人および団体の業績を表彰することを目的としています。日本社会・文化の継承と発展、東アジアの平和と繁栄のために本賞の制定がその一助となることを願っています。

二〇一六年度も全国より応募があり、厳正な審査の結果、お二人の方の受賞が決定しました。

〈第十一回〉二〇一六年度募集分

立命館白川静記念東洋文字文化賞優秀賞

笹原 宏之

早稲田大学 社会科学総合学術院 教授

受賞理由

国字は、関心を持つ人が多く、それらを集めた辞典類も刊行されています。しかし、日本語学において国字に関する研究は活発に行われていたとは言えない状況にあります。そのような中、笹原氏は国字研究を精力的に行ってこられました。その成果をまとめた『国字の位相と展開』などは国字に関する日本語学界初の体系的な研究書で、学術的に極めて高い水準にあり、これを超える研究成果は発表されていません。その後の研究も含め、これらは、日本語学界における国字に関する誤解等を修正するもので、漢和辞典等の記述をより精緻なものにすることに貢献するものです。今後、さらに国字研究を発展することが期待されます。

受賞者の声



く日々です。

漢字とはいっても、私は白川先生とは時代も使う資料も方法も大きく異なっております。特に日本人が変質させていった漢字の方へと関心が移り、漢字圏の中での日本の特徴を考える日々となっております。

地味な終わりの無い国字研究に対して荣誉ある賞を、そして励ましを下さった先生方に改めて感謝申し上げます。

白川先生の全てを疑えという学問に対する姿勢と熱意を私も胸に秘めて、難問が尽きない漢字という魅力あふれる文字と向かいあい、東洋の文字文化の発展に微力を尽くしていきたいと考えております。これから先もあらゆる物事から学び続け、一つでも多くの漢字に関する事実をみつけ、そして、教育や社会貢献に還元していけるように精進して参りたいと考えています。

立命館白川静記念東洋文字文化賞奨励賞

成田 健太郎

東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財財寄附研究部門
特任研究員

受賞理由

成田氏の研究は、平板におちいりがちであった従来の書評研究に膨らみを与え、立体的に考察を加えたという、その試みは成功していると思

われます。唐の張懷瓘ちやうかいかんによる書論『書断』をベースとしながら、「勢」「訣

「風格」「筆勢」など、これまであまり取り上げられなかった視点から、書論・書道史などの知識にとどまらず、ひろく中国文学の知見などもくわえて、深みのある考察を行っています。考察は、独創的でありながら、スタンダードになりうる内容であり、今後、文字学・書道史を学ぶものにとって必読書となると思われます。

受賞者の声



八歳の頃に習字を習い始め、中学・高校の頃には中国の古典、王羲之おうぎし・歐陽詢おうようじゆんの手本を習うようになりました。そして、漢字でどういった事が書いてあるのか内容が気になり、大学で中国文学を専攻しました。その後、中国には書論という書道に関する理論・人々の見方・考え方が書かれた文献が沢山あると聞き、大学院ではその研究の道にすすみました。

そして、今回ご評価を頂きました博士学位論文をもとにした『中国の中古の書学理論』に至ります。本書は、中国古典と仰がれている王羲之・歐陽詢といった書家が出て来た中国中古の時代（後漢〜唐前期）に、美しい書が生み出されるだけでなく、書に対する認識・理解がどのように深まっていったのか、そして人々はどうやって美しい書を実現することができるかと考えていたかを文献をもとに考察しました。

文字を見てこの文字は何をいつているかと思つた小さい頃の自分の気持ちですが、白川静先生のご研究への熱意と重なっていると嬉しく思います。今後とも白川賞の名に恥じないよう研究を進めて行きたいと思ひます。

（以上、編集部）

選考
委員

委員長 杉橋 隆夫 (立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所 所長)

委員 加地 伸行 (立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所 研究顧問)

下中 美都 (株式会社平凡社 代表取締役社長)

芳村 弘道 (立命館大学文学部 教授)

上野 隆三 (立命館大学文学部 教授)

萩原 正樹 (立命館大学文学部 教授)



第11回「立命館白川静記念東洋文字文化賞」表彰式の様子
(2017年4月22日、立命館大学衣笠キャンパス平井嘉一郎図書館カンファレンスルームにて)
前列左より杉橋所長、吉田総長、笹原宏之氏、成田健太郎氏、加地研究顧問

立命館土曜講座特集
「白川学の展望と未来」

運営委員 萩原 正樹

二〇一七年九月、前年度から継続して行っている白川静先生^{ぼつご}歿後十周年企画の一つとして、当研究所担当による土曜講座「白川学の展望と未来」を開催した。当研究所では、これまでにも何回か白川先生の学問をテーマとした土曜講座を開催しているが、今回はその学問が今後どのように展開していく可能性があるかについて、中国の最新の文字学との関わり、コンピューターによる文字処理と古代文字、漢字教育への応用、文字の誕生・継承・伝播^{でんぱ}論の展開、という四つの視点から、五名の先生方にお話頂いた。九月二日から始まった本講座は、毎回二〇〇名前後の受講者が来場され、歿後十年を経過してもなお衰えぬ高い関心が先生の学問に向けられていることをあらためて強く感じさせられた。各回の受講者からは「白川先生の文字学を中国の文字学と比較するという内容が興味深かった」、「白川フォントがデジタル化して、外字でなく、同様に交換されることを初めて知りました」、「漢字を系統的に学ぶという考え方の重要さがよくわかった」、「文字とことばのかかわりを見事に説明され、おもしろかった」等の声が寄せられている。以下にそれぞれの講演の概要を紹介し、立命館土曜講座の特集「白川学の展望と未来」開催の報告としたい。(文学部教授)

◆「白川文字学の今後の展望」(九月二日)

大形 徹 (大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科教授)

七月に上海の華東師範大学を訪れ、Journal of Chinese Writing

Systems の編輯会議に参加した。この大学には老舗の学術雑誌『中国文字研究』がある。イギリスで出版するという。国の予算もある。日本四、韓国四、ベトナム二、イギリス、イタリアから一名ずつと中国の学者、あわせて四十数名が集まった。出版はSAGE（シンガポール）である。かつて毛沢東は「象形文字から音標文字」への切り替えを提唱した。簡体字を作り、漢字を簡素化し、その後、音標文字にする。その一環としてアルファベットのピンインを作成した。「你是中国人吗？（あなたは中国人ですか）」は、「[Ni shì Zhōngguó rén ma?]」と書く。中国の発音記号だが、文の最初や固有名詞は大文字から始め、疑問文の文末には「？」がつく。漢字をなくしてもピンインで英語のような文になる。実際、中国ではパソコン入力力はピンインなので毛沢東の考えは半ば実現している。

ところが現在、中国は象形文字から始まる表意文字「漢字」の面白さをアルファベットの国、イギリスに英語で発信しようとしている。白川静氏の『字統』なども英語に訳せば、興味をもって迎ええられるのではないかと思う。

講座では、連続講座の初回であったため白川先生についてのあらましを写真やビデオなどで紹介した。また白川研内の漢字学研究会の活動について説明した。白川静の金文研究を継承する『漢字学研究』の内容、また漢字学研究会会員の近著、研究成果について紹介した。

佐藤信弥（大阪府立大学人間社会学部研究員）

白川文字学の特徴は、漢字の三要素である字形・字義・字音のうち、特に字形の分析を重視することにあるとされています。実のところ、中国の文字学者も甲骨文字など古文字の研究は字形を主とすべきであると言っています。

ただ、同じ字形重視でも、白川静はその文字が何をかたどっているの

かを読み取ることを目標とするのに対し、中国の学者は、甲骨文字↓金文↓戦国文字↓小篆の各段階で字形がどのように変化して現在の形になったのかを整合的に説明することを目標としており、その内実は大きく異なります。

中国での研究が、従来用例の不足していた戦国文字の急増によって大きく進展している一方で、白川式の方法論はこの新しい材料の増加にうまく対応できていないように思います。こうした両者の研究手法の得失を考えることで、白川文字学の今後の展望を探っていききたいと思います。

◆「コンピュータによる文字処理の歴史と展望」（九月九日）

前田 亮（情報理工学部教授）

現在Web上では膨大な量の文書が提供されており、日々増え続けています。また、個人の間では、電子メールやSNSでのコミュニケーションがパソコンやスマートフォンなどを通じて活発に行われ、すでに現代の我々の生活に欠かせないものになりました。Web上の文書やSNSで交わされるメッセージは、文字情報が基本となっています。

このような文字情報あるいは言語情報をコンピュータで扱う技術は、コンピュータの発明以来、多くの紆余曲折を経て、発展してきました。白川静記念東洋文字文化研究所では、甲骨文字・金文・篆文など、現在の漢字の原型となった古代文字をコンピュータで扱うためのフォント「白川フォント」を作成して無料公開しています。現在使われている文字・言語だけでなく、過去に使われた文字や言語をコンピュータで扱うことができる時代に来ています。

本講座では、文字情報や言語情報をコンピュータで扱うための技術の発展の歴史について紹介し、さらに「白川フォント」の作成の経緯や古典資料の言語処理技術を紹介することで、今後のコンピュータ上の文字処理・言語処理の発展の可能性や課題について、みなさんと一緒に考

えてみたいと思います。

◆「白川文字学に基づいた漢字教育の可能性」(九月十六日)

―成り立ちとつながりで学ぶ漢字学習―

後藤文男(立命館小学校学校長)

白川静先生(一九一〇〜二〇〇六 立命館大学名誉教授 は最晩年、自らの「文字学」の成果を広く学校教育の現場で活用してほしいと精力的に漢字教育に関する講演を行われました。白川先生の提唱された漢字教育は「成り立ちとつながりで漢字を学ぶ」ということでした。ともすれば、書いて覚えるだけの機械的で単調な作業に陥りやすい漢字学習に、「漢字のルーツ＝成り立ち」と「漢字のつながり」を知って覚える覚え方があることを伝えたいとの思いからでした。白川先生はその学習法を「理想の漢字教育」と呼んで、漢字教育に新しい風が起ることを願っておられました。現在、立命館の付属の小・中学校では白川先生の遺志を継ぐと「白川式漢字学習法WG」を立ち上げ、授業開発や教材づくりに取り組んでいます。『成り立ちとつながりで学ぶ漢字シート35』と題したワークシートを第二集まで作って現場での実践に役立てています。

◆「古代中国における文字の誕生・継承・伝播の過程を跡づける

―白川文字学第二世代としての展開」(九月三十日)

高島敏夫(文学部非常勤講師)

殷代に生まれた文字(甲骨文)が、殷を滅ぼした西周王朝に伝えられ(金文)、さらに他の部族へと伝わって行った過程を跡づける話です。これまでこの問題を正面切って論じた人を知りません。このような考察が可能になったのは白川先生が築かれた体系的な文字学があったからこそです。私は若い頃から先生の『甲骨金文学論叢』と『金文通釈』とを

かなり綿密に読んできましたが、これらの論者が暗示しているところの、文字誕生から継承へ、さらには伝播へと向かうその過程についても、少しずつはつきりと見えるようになってきました。そしてこの問題が、文字とは何か、文字というものをどう考えるかという問題と密接に関係していたことに思い至りました。

拙著『甲骨文の誕生 原論』(人文書院)は「文字とは何か」という問題を前面に出した漢字誕生論ですが、ここで提示したのは、いわゆる口語とは別の文語的な特別な口頭言語を記すために作られたのが文字であるという文字観です。こうした文字観は、実は白川先生の研究、とりわけ『説文新義』をお書きになった時点で、かなり近い考えがうかがえるような気がしていたのですが、終にそこに踏み込まれまいままになりました。今回のテーマはこの文字観に触れながら進めていきます

シンポジウム「東洋の漢字文化と白川静」

運営委員 萩原 正樹

二〇一七年十月二十七日、第一六八一回「ゴールデンエイジアアカデミー」【立命館大学連携講座】として、「シンポジウム 東洋の漢字文化と白川静」が京都市中京区の京都市生涯学習総合センター(京都アスニー)において開催された。

シンポジウムでは、まず司会の萩原が白川先生について簡単な紹介を行った後、大阪教育大学の張莉先生による「中国の漢字文化―起源から現代まで」、また韓国・高麗大学の沈慶昊先生による「韓国朝鮮半島の漢字文化」と題する報告が行われた。張莉先生の報告では、中国の漢

字文化について、文字以前の符号から漢字の字形の変遷、さまざまな書体等について分かりやすく解説され、許慎の『説文解字』と白川先生の『説文新義』との字説の違いから、さらには日本の国字にまで話が及ぶ、大変興味深い内容であった。写真や図版を多く用いたパワーポイントを使ってお話は、初めて白川先生の文字学に触れる参加者にとっても親しみやすく、多くの参加者が熱心に話を聞いていた。また沈慶昊先生による報告では、私たち日本人が普段あまり知る機会のない韓国の漢字語彙や、韓国漢文の文体、李朝の漢文文化、ハンゲルと漢字の併用、また韓国の庭園文化や韓国の建物名・地名の意味などについてもお話を頂いた。沈慶昊先生も豊富で美しい写真を使用したパワーポイント映像を示しながら、高度な内容を流暢な日本語により分かりやすく解説され、来聴者はその巧みな話術と興味深い内容に引き込まれていた。両先生の充実した報告内容のため時間が足りず、質疑応答などによりさらにお話を伺う機会が持てなかったのは残念であったが、参加者の多くは中国と韓国の漢字文化と白川静先生について理解を深め、さらなる関心を寄せていた。

シンポジウムの様子はアスニー山科にも同時中継され、併せて五五〇人の来聴者があり、シンポジウムは盛況のうちに終了した。京都アスニーの関係者によると、常連で来て頂いている受講者だけではなく、新しい受講者も多く見かけられたとのことであった。なお当日の夕刻には衣笠キャンパス・末川記念会館第二会議室において懇親会が開かれ、沈慶昊先生、張莉先生と当研究所の杉橋所長、芳村副所長らが参加して、両先生を慰労して歓談するとともに、研究の情報交換なども行われた。

(文学部教授)

第八回創作漢字コンテスト

研究顧問 加地 伸行

産経新聞と共催の「第八回創作漢字コンテスト」の結果が、二〇一七年十二月二十七日に同紙上において発表された。

今回の応募は、昨年並みの一万三五八四点であったが、その半数強が高校生以下であった。それも、学校単位で応募してきたものが多く、おそらくは教員による指導や夏休みの宿題の一つとなっていたのではなからうか。

そこで、学校としてまとまって応募し、かつそのすべてが優秀な作品であったノートルダム清心高校（広島市）に対して、特別賞を出すことにした。

最優秀賞は二点で、「舞」は社会人の作品で、漢字創作の正統派。訓・意味は、フィギュアスケートあるいはアイスダンス。「颯」は中学生の作品で、デザイン派。訓・意味は、ティッシュペーパー。

社会人・大学生が対象の部門、高校生以下が対象の部門、両者共通の成語・慣用句部門のそれぞれにおいて、各五本の優秀作品が選ばれた。右総計二十七点の内、高校生以下が十五点で過半数を超えている。おそらく次回以降、中高生らの作品がもっと増えてゆきそうな予感がする。そうになると、成人と高校生以下との区別の必要がなくなるかもしれない。成人の場合は、個人に基づくが、高校生以下の場合、教員の指導やアドバイスが加えられるであろうので、質がさらに上がることが期待できそうである。

作品の具体例は、産経新聞紙を見ていただきたい。年々、質が向上し、洗練されたものが増え、このコンテスト初期のころのような複雑なもの

はもはや選外となつてきつつある。
 なお立命館附属校からの応募も多く、その一つが、今回、最優秀作品
 となつた「圃」である。
 (大阪大学名誉教授)



【訓・意味】
 フィギアスケート
 アイスダンス



【訓・意味】
 ティッシュペーパー

学術事業活動概況 (二〇一七年度)

副所長 芳村 弘道

二〇一七年四月二十二日に「研究活動報告会」を実施し、各学術部門における過年度の活動をまとめ、新年度以降の展望を示すことが行われた。本年度の学術事業としては、昨年度後半に始まった白川静博士歿後十年を記念する活動を本年度も継続し、以下の公開講座を主とする企画を実施した。

一つには高島敏夫客員研究員による「甲骨文(卜辞)を通して殷代社会に分け入る」と題する全三回の連続講座である。白川博士の『甲骨文の世界』に基づく卜辞資料を読み、殷代の社会や人々の思考や世界観に理解を及ぼそうとする内容で、漢字成立の背景にある言語世界への理解が一般の聴講の方々に深まったと思われる。

二つには九月の「土曜講座」における「白川学の展望と未来」というテーマでの四回の連続講座である。第一回(本学衣笠総合研究機構の大形徹招聘教授、佐藤信弥客員研究員)では、海外へ向けての漢字学の発信、また戦国期の文字資料の急増に対する白川文字学の方法論の問題点が呈示された。第二回(本学情報理工学部の前田亮教授)は、当研究所が作成した古代文字の「白川フォント」作成経過も紹介し、コンピューターによる文字処理の過去から未来への歩みを示すものであった。第三回(本学教職大学院の後藤文男准教授・立命館小学校校長)は白川静博士が力説された成り立ちを理解し、かつ系統的に学ぶ漢字教育の実践を紹介し、白川文字学による漢字教育の可能性が解説された。第四回(高島敏夫客員研究員)は白川博士の体系的な文字学に導かれて、「古代中国における文字の誕生・継承・伝播の過程」をたどろうという内容であつ

た。この連続講座は、当研究所として白川博士の文字学の継承をいかに進めて行くべきかという重要な問題提起の意味合いにもなった。

三つには京都アスニーにおける「シンポジウム 東洋の漢字文化と白川静」を開催し、高麗大学の沈慶昊教授、大阪教育大学の張莉特准教授と本学文学部の萩原正樹教授がパネラーとして白川博士の学問に触れながら、日中韓の漢字文化について論じた。白川博士が熱い思いをもって説かれた東洋の漢字文化の重要性が、日中韓の研究者によるこのシンポジウムを通して十分に伝えられた。

以上のほか、日中韓の漢字の現況や白川文字学をめぐって、書家で本学文学部心理学専攻卒業生華雪氏・大阪教育大学の張莉特准教授・本学文学部の金津日出美准教授が語り合い、また華雪氏の揮毫も行われた講演会「漢字と書―日中韓のはざまと女性」を開催した。十月からは白川静博士の「文字講話」全二十四回の特別上映会を毎月開催し、白川文字学の普及を図る一つの継続活動とした。また当研究所の紀要十一号を年度末に公刊した。



立命館白川静記念
東洋文字文化研究所紀要第十一號
(立命館大学白川静記念東洋文字文化研
究所 二〇一八年三月)

国際交流活動では、十二月九日に南京大学域外漢籍研究所が主催した「第五回東亞漢籍交流国際学術会議」に参加し、同研究所および韓国の高麗大学校漢字漢文研究所と相互に学術交流協定を締結した。漢籍文献の伝播・受容は、東洋の漢字文化において重要な位置を占めるものである。これまで南京大学域外漢籍研究所と高麗大学校漢字漢文研究所とが

学術協定を結び、この方面の研究を進めていたが、当白川研が日本の研究機関としてこれに参画することによって、名実ともに東アジア規模の国際学術活動が果たされることになった。この学術協定の実行を通して当該研究の発展と国際交流に貢献して行きたい。
(文学部教授)



(左) 高麗大学校漢字漢文研究所所長の沈慶昊教授
(右) 杉橋所長



(左) 杉橋隆夫当研究所所長
(中) 南京大学域外漢籍研究所所長の張伯偉教授

漢字学研究会活動報告(二〇一七年度)

運営委員 大形 徹

白川静『金文通釈』の続編を作ることを課題とし、七〇年代末以後に発見された新出金文の講読や甲骨文・金文など古文字・出土文献学に関する研究に取り組んでいる。成果は『漢字学研究』に発表。毎月第三土曜にキャンパスプラザ京都(京都市大学のまち交流センター)大学院等共同サテライト講習室にて年間十回の研究会を開いている。

二〇一七年四月二十二日に立命館大学白川静記念東洋文字研究所「研究成果報告会」として、佐藤信弥・大形が「漢字学研究会」について話した。九月二日に「白川文字学の今

後の展望」と題して末川記念会館で

佐藤・大形が講演した。九月十五

十八日に中国湖北省三峡大学で開催

された「世界漢字學會第五屆年會」

漢字文化圈各表意文字類型調査整理

研究報告「國際學術研討會」に参加。

大會主題發言(基調講演)として、

大形徹が「關於「有朋自遠方來」原

為「友朋自遠方來」之可能性」。分組

發言(分科會講演)として、出野文

莉(張莉)が「從白川靜博士解釋甲

骨文所見祭祀的發展過程」、山田崇仁

が「關於在中華文明的「文字」含意

的詞的歷史的變遷」、佐藤信彌が「商



張・臧克和(世界漢字學會會長・華東師範大學終身教授)・大形・佐藤・山田

周金文中「蔑歷」之作用」を発表。張莉は分科会の司会とコメントーター、山田・佐藤もコメントーターを務めた。張莉・大形は閉幕式で揮毫を徳憑しんようされた。

会員は各種の学会に招待された。十月二十一・二十二日に国立歴史民俗博物館で開かれた歴博国際シンポジウム「年号と東アジアの思想と文化」で基調報告として大形が「年号と貨幣―中国貨幣、漢興・大夏真興あたりを起点として―」を発表。十二月二・三日に東京大学にて開かれた日本中国考古学会において佐藤は角道亮介「周原遺跡にみる西周都城の機能」のコメントーターをつとめた。また大阪大学の中国出土文献研究会と共催で七月十六日に特別講演会「竹簡学の現状と展望」、二〇一八年二月十日に「新出土文献による中国学の展開」を開いた。

(大阪府立大学大学院教授)

以下、議事録(佐藤信弥)より摘録

第五十二回 四月十五日 佐藤信弥「始祖伝説としての「太公望」」

第五十三回 五月六日 秋山陽一郎「栄仲方鼎」

①第六十六回東北中国学会 参加報告(佐藤)

第五十四回 六月十七日 秋山陽一郎「栄仲方鼎」

第五十五回 七月二十二日 佐藤信弥「大阪大学特別講演会参加報告」

末次信行「廻尊」

第五十六回 九月九日 松井嘉徳「呉虎鼎」

中國文字學會

台湾の朱歧祥氏より第二十九屆中國文字學國際學術研討會(二〇一八年五月、國立中央大學)の案内あり。

第五十七回 十月八日 笠川直樹「多友鼎」

佐藤信弥・山田崇仁「世界漢字学会第五屆年會参加報告」

世界漢字学会は韓国慶星大学に本部、運営は上海の華東師範大学中国

文字研究と応用中心。各国持ち回りで年会。第五周年会は三峽大学（宜昌市）。中国・台湾・韓国・日本・ベトナム・アメリカ・ドイツなどより参加。

〔新入会員〕 坂本智子（京都府立南陽高校）

第五十八回 十一月十八日

福田哲之「北大漢簡『蒼頡篇』の編聯復原に関する試論」

佐藤信弥「二〇一六年 新公表の出土文献」

〔新入会員〕 竹田健二（島根大学教育学部）

第五十九回 十二月十六日

佐藤信弥「日本中国考古学会二〇一七年度大会」参加報告

笠川直樹氏「多友鼎」

執筆時点（二〇一八年一月十日）で一月と二月の研究会は未開催。

立命館白川静記念東洋文字文化研究所 編

漢字学研究 第五號

（立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所 二〇一七年九月）



教育活動報告（二〇一七年度）

研究員 後藤 文男

二〇一七年度も各附属校の「白川式漢字学習法ワーキンググループ（白川WG）」の先生方を中心に、以下のような活動を展開しました。

① 漢字ワークシート「成り立ちとつながりで学ぶ漢字35」の作成。

漢字ワークシート『成り立ちとつながりで学ぶ漢字35』の第三集の刊行に向けて、毎月一回の定例会で検討を重ねました。二〇一八年度前期に「第三集」を完成させることを目標に取り組みを進めています。

② 「白川静パネル展」の開催。

今年度は立命館慶祥中学高校（二〇一八年一月十六日～一月二十二日）と立命館小学校（二〇一八年一月二十七日～二月二十八日）で開催しました。白川先生の紹介パネルと甲骨・青銅器のレプリカの展示を通して漢字を生み出した古代の社会を身近に感じることのできる学びの場となっています。「白川研」の文化事業部門の協力で、年々甲骨・青銅器のレプリカの数が増え、展示が充実してきています。



「白川静パネル展」の様子

③ 「白川文字学に基づいた漢字学習（白川漢字）」の取り組み。

現在、立命館学園の四つの附属中学校と立命館小学校の六年生では、国語の漢字学習の中で漢字ワークシート「成り立ちとつながりで学ぶ漢

字35」を用いて授業に取り組んでいます。どの先生にも取り組んでもらえるようにパワーポイントを用いた補助教材の作成にも挑戦しています。また、WGの先生方を中心に特別授業にも取り組んでいます。立命館小学校では、二〇一八年一月二十七日の公開授業研究会の中で、司書教諭の大橋輝子先生が全国から参加の先生方の前で、小学校一年生に白川先生の「口（さい）」の発見をテーマとした授業に取り組みました。子供たちが「口」が何なのか、あれこれ考えながら、一年生で習う「口」の字の入った漢字の成り立ちについて楽しく学習しました。

④ 「白川漢字」を学ぶための新教材の開発。

昨年度から立命館守山中学校の犬飼龍馬先生を中心に、iPadを用いた漢字学習に取り組んでいます。「ロイロノート」と呼ばれる双方向で学ぶことのできるシステムを使っている学習ですが、今年度は立命館小学校でも「ロイロノート」を用いた教材の開発を試行しています。今後の展開が楽しみです。

⑤ 白川文字学に基づいた漢字講座等の開催。（担当：後藤）

昨年度から大阪府河内長野市の市民講座「くろまる塾」で、漢字講座に取り組んでいます。昨年度は八月～九月にかけて「手の七変化」・「神様はかみなりさま」・「人の一生」をテーマに、今年度は七月から八月にかけて「貝は宝物」・「足あとを頭へのせる人」・「魔除けの矢を放つ」のテーマを加え、六講座行いました。大阪南部の小さな都市ですが、どの講座とも一〇〇名近くの熱心な方々に参加していただいています。年齢層は高齢者の方が多いです



「くろまる塾」の様子

が、これまで使ってきた漢字にこんな成り立ちとつながりがあったのかと驚かれることが多いです。白川漢字の可能性を感じさせる講座となっています。

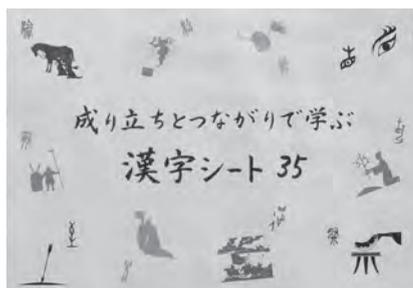
九月には立命館大学の土曜講座にて「白川文字学に基づいた漢字教育の可能性」と題した講演を行いました。

十一月には、オンライン大学講座JMOOCの「漢字教育(三) 教材開発」で「理想の漢字教育」についての授業をしました。

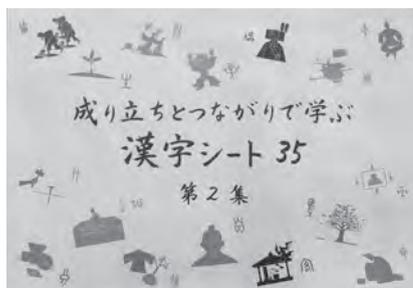
十二月には日本の伝統文化を守ろうと取り組んでいる「ジャポニズム振興会」主催の「第六回伝統文化をつなぐ会」にて「藝に学ぶ」をテーマに講演をしました。

二〇一七年度は報告者（後藤）の勤務先の異動などもあって十分な活動ができないこともありましたが、それでも漢字ワークシート「成り立ちとつながりで学ぶ漢字35」（第三集）の作成を毎月続けてきました。できれば、二〇一八年度前半には編集を終え、後半には第一集から第三集までをまとめて白川漢字の基本素材集として広く世に問いたいと考えています。

（立命館小学校校長）



成り立ちとつながりで学ぶ
漢字シート 35 第1集



成り立ちとつながりで学ぶ
漢字シート 35 第2集

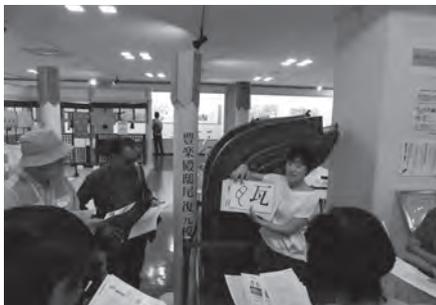
文化事業活動報告(二〇一七年度)

文化事業担当職員 久保 裕之

体験型漢字講座「漢字探検隊」

二〇一七年度より始まった「漢字探検隊」は、毎回一つのをテーマとして、座学だけではなく、見学や体験を通して漢字の成り立ちとそのもとになった自然や文化を学習する体験型の講座である。これまでの開催回数は一六〇回を突破した。二〇一七年度は全国五府県で一・二回開催され、延べ約一〇〇〇名の参加があった。

各地の開催では漢字を楽しむ会 遊等の団体や各地の漢字教育士の協力を頂いている。



2017年6月 京都漢字探検隊
「平安京で漢字と出会う」



2018年1月 京都漢字探検隊
「お酒と漢字」

学内他組織との連携事業

立命館附属校教員との白川文字学に基づく漢字教材制作ワーキンググループ(詳細は別稿に)も四年目を迎え、その研究出版である『成り立ちとつながりで学ぶ漢字シート35』は第二集まで刊行、附属小中学校で教材として使用されている。現在は第三集の刊行に向けて編纂が進んでいる。

国際平和ミュージアムとの連携で



2017年11月 立命館守山中学校・高等学校「白川静展」

茨城		福島		兵庫		滋賀					京都	地域
17	16	11	5	4	14	13	54	53	52	51	50	回
2018・1	2017・12	2017・10	2018・3	2017・7	2017・12	2017・6	2018・2	2018・1	2017・12	2017・9	2017・6	実施年月
災害・土木	建物・道具	—	神	酒造り	書体	人体	—	酒造り	書体	書体	建物・道具	テーマ
秘密を探れ	土浦市立博物館にある漢字の秘密を探れ	漢字あそび大会インいわき	神様と漢字	お酒と漢字	むかしの漢字を書いてみよう	漢字ジェスチャー大会	漢字あそび大会	お酒と漢字	はんこを作ろう	消しゴムはんこを作ろう	平安京で漢字と出会う	講座名
50	20	100	86	64	41	47	300	86	74	66	55	参加者数
土浦市立博物館、土浦城	土浦市立博物館、土浦城	いわき市産業創造館	射橋兵主神社(姫路市)	灘菊酒造(姫路市)	草津市立市民交流センター	草津市立市民交流センター	立命館朱雀キャンパス	月桂冠大倉記念館	立命館朱雀キャンパス	立命館朱雀キャンパス	京都アスニー・平安京創生館	場所

平和と言葉について考え、表現しようという催し「平和ってなに色 文字・活字文化の日特別企画」も引き続き開催した。平和への願いを一字で表すコーナーを設け、参加者には虹の七色等の漢字について解説したカードをプレゼントした。

立命館大学が全国各地で開催している父母教育懇談会の中の「教員によるミニ講義」。これまでは一部会場で行われてきたが、今年から全会場で開催することとなった。白川研関係では、青森県、東京都、沖縄県会場で漢字教育士（齋藤ミツ、久保裕之）が出講した。

立命館大学が展開している社会人向け学習組織「立命館アカデミックセンター」では、「白川文字学」を重要なテーマに位置づけ、大阪キャンパスにおいては、二〇一七年十一月から十二月にかけて「漢字の謎」講座を開催、また東京キャンパスでは、本学卒業の書家である華雪氏を招いて講座を開催、好評を博した。

他の機関との連携

公益財団法人日本漢字能力検定協会（京都市）とは「漢字教育士」養成講座事業の受託を契機に、同検定受検者への当研究所の広報活動や情報交換等が活発に行われ、六〇〇名を超える「漢字教育士」の重要な輩出元となっている。産経新聞社（東京都千代田区）との共催で開催している「創作漢字コンテスト」は今年で第八回を数え、応募者数は約一万三千通を数える。本コンテストは富国生命保険株式会社と株式会社Z会からの協賛を受けている。（詳細は別項に）

放送大学大阪学習センター（大阪市）では同校の面接授業に「漢字学」を開講、八科目を修了すると「漢字教育士」資格が取得できる。

京都三条会商店街とは、「漢字あそび大会」において「古代文字ラリー」を開催。参加店舗に掲げられた古代文字を巡る取組を行い、漢字を仲立ちとした新たな交流が見られた。

このほか、石川漢字友の会（石川県金沢市）、摩気高山こども未来塾（京都府南丹市）、勝山市立荒土小学校（福井県）、庄原市立口北小学校（広島県）、桐朋女子中学校（東京都調布市）に出張講座に招かれた。

自治体との関わり

福井県では小学校に「白川文字学」に基づく漢字教育を取り入れる政策を実施しており、県内に拠点校を設け、研修や学習会が開催されている。この取組はさらに中学・高校教育の領域へ広がりを見せている。「福井県白川静漢字教育賞」への協力や「漢字教育士研修会」への講師派遣を受けたりするなど、緊密な関係が続いている。

本学びわこ・くさつキャンパスを擁する立命館大学と草津市とは、すでに教育研究連携に関する協定を締結しているが、同市では基礎学力の定着と学習意欲の向上を図るため、二〇一〇年度より市立の全小・中学



2018年2月 勝山市立荒土小学校



2018年3月 広島県口北小学校



2018年2月 京都漢字探検隊
「漢字あそび大会—古代文字ラリー—」

校にて漢字・計算・英語の三検定の受験に取り組みようになった。そのうち漢字教育を側面支援するため、草津市教育委員会との共催事業として「草津漢字探検隊」が二〇一一年度から始まり、年二回の開催も定例化している。

兵庫県朝来市和田山生涯学習センターでの市民講座は二〇一一年度から始まり、七年目を迎えた。五月から十一月まで連続開催され、今年度は二〇一八年二月開催の漢字検定受験を目標に学習を進めた。また京都市とは、京都市生涯学習総合センター（京都アスニー）において「東アジア文化都市二〇一七 京都連携事業・シンポジウム『東洋の漢字文化と白川静』」を共催した。大阪教育大学特任准教授・張莉氏と韓国・高麗大学教授の沈慶昊氏を招いて、本学萩原正樹教授の進行により開催、六〇〇名を超える来聴者があり、市民の関心の高さをうかがわせた。

兵庫県姫路市での取り組みもますます盛んになっている。姫路市生涯学習センターで開講中の「漢字学」は第二期生も入学、二〇一八年度には第三期生の開講も確定している。「漢字探検隊」も毎回定員を超過する申し込みがあった。

この他、京都府宇治市（三回）、大阪府河内長野市（二回）の講座に招かれた。こちらも二〇一八年度継続の予定である。



2018年3月 姫路漢字探検隊「神様と漢字」



2017年7月 姫路漢字探検隊「お酒と漢字」



2017年7月 宇治市生涯学習センター

東日本大震災復興支援活動「漢字で元気に」

「漢字で元気に」は、二〇一一年三月に発生した東日本大震災の復興支援活動の一つとして、年齢・性別に関わらず共通の話題にできる漢字・日本語を、家族をはじめとするコミュニティの交流ツールとなるように、そしてそこから生まれてくる絆の力を震災復興に向けられるように、さまざまな話題や知識を提供する活動を行おうとする試みである。二〇一一年十月に福島市と宮城県角田市とで活動を開始、その後岩手県大船渡市での「漢字あそび大会」を開催した。二〇一七年は初めて福島県の浜通り地方での活動を行い、いわき市産業創造館での「福島漢字探検隊漢字あそび大会いわき」と、楡葉町立楡葉南小学校・同楡葉北小学校への訪問授業を行った。福島県での活動では、福島大学・澁澤尚研究室の協力を仰いでいる。また宮城県では、文化教育サポーターズの協力を受け、角田市立角田小学校への訪問授業を行った。



2017年10月 楡葉南北小学校

七年目を迎えた「漢字教育士」の活動

文化事業担当職員 久保 裕之

二〇一一年度に創設した「漢字教育士」資格認定制度もまる七年が経過し、今では資格認定者が六〇〇名を数えるようになりました。

「漢字教育士」とは、漢字の成り立ちや文化的背景、現代の漢字・日本語の状況を理解し、幅広い知識を有するとともに、「教える力」を身につけた方です。漢字の楽しさを知った方が、それを伝えることにより、世の中に漢字文化の種をまき、花を咲かせようという思いから、この資格は生まれました。日本の社会においては、漢字・日本語は老若男女にかかわらず広く使われる媒体です。「漢字教育士」の活動が、人々の交流を広げ、絆を強めるものになることを期待しています。

漢字教育士資格認定講座の方式は、①指定機関での指定科目の修了、②漢字教育士資格認定ウェブ講座の修了の二つです。

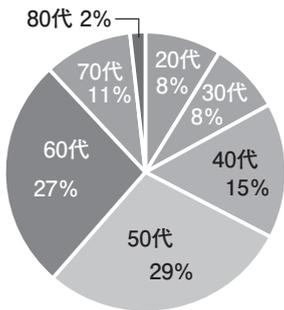
指定機関としては、放送大学大阪学習センターでの面接授業「漢字学」が毎学期開講されており、毎回関西地方をはじめとする全国からの聴講申込のある人気科目となっています。八単位取得が「漢字教育士」資格取得の条件となっており、その取得には最短四年かかりますが、地道に単位を取得して「漢字教育士」の取得をされた方も五名いらっしゃいます。また姫路市生涯学習大学校では、二〇一六年度より二年コースの「漢字学」が開講しました。現在第一期生・第二期生各七〇名の方が対面講座で学んでおり、二〇一八年度にも第三期生の開講が決定しました。

ウェブ講座は二〇一六年二月より立命館アカデミックセンターの直営講座の一つとして行われています。時間的・空間的制限がないのでどなたでも受講でき、日本国内はもとより、海外在住の日本人・外国人の受

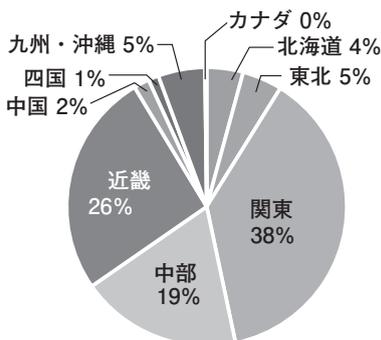
講も増えています。また公益財団法人日本漢字能力検定協会（漢検協会）との提携も大きな効果を上げています。漢検協会は漢検受験で培った個人の漢字能力を社会に還元できる人材を育てようと「漢検漢字教育サポーター」制度を二〇一二年に創設、一級・準一級合格者からなる「漢検漢字教育ネットワーク」会員の中から毎年一〇〇名ほどの方が選抜されて本講座を受講しています。二〇一八年三月をもって第六期の受講が修了、四月からは第七期の受講が始まります。

漢字教育士は二〇一八年二月末現在六〇三名で、その活動拠点は全国そして海外に広がっています。内訳は名誉漢字教育士二名（白川静博士と武田鉄矢氏）と特別認定者二四名、課程修了による認定者五七七名です。そのうち、課程修了による認定者の内訳は左の表の通りです。

年代別統計



地方別統計



白川静著書一覽

- ・『説文新義』（白鶴美術館 全十六卷 一九六九年～一九七四年）
- ・『漢字―生い立ちとその背景』（岩波新書 一九七〇年四月）
- ・『詩経―中国の古代歌謡』（中公新書 一九七〇年十一月）
- ・『金文の世界―殷周社会史』（平凡社〈東洋文庫〉一九七一年一月）
- ・『甲骨文の世界―古代殷王朝の構築』（平凡社〈東洋文庫〉一九七二年二月）
- ・『孔子伝』（中央公論社〈中公叢書〉一九七二年）
- ・『甲骨金文学論集』（朋友書店、一九七三年）
- ・『中国の神話』（中央公論社 一九七五年一月）
- ・『中国の古代文学』（全二巻 中央公論社 一九七六年四月～十二月）
- ・『漢字の世界―中国文化の原点』（平凡社〈東洋文庫〉全二巻 一九七六年二月～三月）
- ・『漢字百話』（中公新書 一九七八年一月）
- ・『初期万葉論』（中央公論社 一九七九年四月）
- ・『中国古代の文化』（講談社〈講談社学術文庫〉一九七九年十月）
- ・『中国古代の民俗』（講談社〈講談社学術文庫〉一九八〇年五月）
- ・『字統』（平凡社 一九八四年八月）
- ・『文字逍遙』（平凡社 一九八七年四月）
- ・『字訓』（平凡社 一九八七年五月）
- ・『文字遊心』（平凡社 一九九〇年四月）
- ・『詩経国風』（平凡社〈東洋文庫〉一九九〇年五月）
- ・『後期万葉論』（中央公論社 一九九五年三月）
- ・『字通』（平凡社 一九九六年一〇月）
- ・『詩経雅頌』（平凡社〈東洋文庫〉全二巻 一九九八年六月～七月）
- ・『白川静著作集』（平凡社 全十二巻 一九九九年～二〇〇〇年）

- ・『字書を作る』（平凡社 二〇〇二年一月）
- ・『白川静著作集 別巻』（平凡社 全二十九巻 二〇〇二年～）
- ・『白川静 文字講話』（平凡社 新版 二〇〇二年九月～二〇〇七年二月）
- ・『桂東雜記』（平凡社 I～V・拾遺 二〇〇三年六月～二〇一〇年五月）
- ・『常用字解』（平凡社 二〇〇三年十二月）
- ・『白川静と漢字―東洋の精神』（紀伊国屋書店 二〇〇四年十二月）
- ・『人名字解』（平凡社 二〇〇六年一月）

※初版のみを記す

【今後の事業計画について】（当面の予定）

- ◆「文字講話」特別上映会 十一時～十三時
平井嘉一郎記念図書館カンファレンスルーム
- 四月二十一日 第七話「祭祀について」
- 五月二十六日 第八話「国家と社会」
- 六月二十三日 第九話「原始法について」
- 七月二十一日 第十話「戦争について」
- ◆「白川静記念東洋文字文化賞」表彰式 五月二十六日
- ◆「研究成果報告会」
- ◆「第六回東亜漢籍交流国際学術学会」 一二月八日～九日
- ◆「日本古文書学会」（共催） 九月八日～一〇日 歴史館
- ◆「日本伝統鍼灸学会」（共催） 大阪いばらきキャンパス